

# 研究が進まないとき，どうするか

—「研究が何であるか」まだわかっていない言語研究者の卵のための助言—

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

## 1 はじめに

そろそろ修論の季節である。今年も、何人かの学生が、修論を仕上げようと四苦八苦している。今まで何年も、何度となくそういう機会に接してきたが、今年はちょっと今までとは状態がちがうようだ。

ハッキリ言うと、学生の底力が足りないようだ。

これはちょっと例年がない、異例なことで、先輩の多くは(秘かに)頭を抱えている<sup>1)</sup>。

非常によく知られた事実であるが、江戸に遷都されるまで日本の首都があった近畿地方の一都市にある元国立大学の「京 大学」の学生であることが含意することの一つは、指導教官の言うことを聞かないことである<sup>2)</sup>。理由は幾つかあるがそのうち有力だと思われるのは、学生の方が指導教官よりも学力、知力、研究力があることが稀ではないからである。だからこそ、今まで京 大の教官は真面目に学生の指導をしない、いや、それ以前に真面目に講義せずとも「まあ、何とかなった」のである<sup>3)</sup>。

だが、そういう天下太平的な状況は徐々に変わりつつある。事実、今の私の出身の研究室の修士の院生で学部から京 大生だった人物は一人だけ、その一人も京 大学の「典型」に比べると、独立独歩力

で見劣りがする感じが否めない。

彼らは私の学生ではなく、私は彼らを指導する立場にはない。とはいえ、まったく彼らを手助けできないわけではない。今回は最近の彼らの動向を見て、私から見ると少し考え方を改めて方がいいと思う点があったので、助言することにした。

その助言をこのような形で公開するのは、世の中には私の助言があてはまる研究者の卵が、他にも幾らでもいるはずだと信じるからである。

## 2 「研究が何であるか」わかっていない言語研究者の卵のための助言

以上のような理由から、私は以下のような、三つ助言をしたいと思います：

- (1) 下らない論文や研究書を読む時間があつたら、その時間を惜しんでデータを見なさい<sup>4)</sup>。そうやって、どんどん直観を磨きなさい。
- (2) その中から一つでいいから何か「きつとこうだ」と思えるものを見つけなさい
- (3) 自分の探しているもの — それが「重要な事実」であれ「何かの答え」であれ「うまい説明」であれ — それが研究書、誰かの論文、教科書にすでに書かれていて、探せば見つかる と期待するのは止めなさい。

この三つの下で、次の指針を示します：

- (4) どうせ研究をするのなら、いい研究をきなさい。
- (5) いい研究をするためには
  - a. 失敗を恐れてはいけない
  - b. 無知を恐れてはいけない

<sup>1)</sup> 私はすでに研究室の人間でなくなって何年にもなるのだが、今だに出身研究室に出入りしていて、あれこれ後輩の面倒を見ているのである。それは家が比較的近いのと、それが楽しいからである。実際、後輩の相談に乗っていると、頻繁に非常にいい研究のアイデアが浮ぶ。それは「彼らと話すまで、言語学にそういう問題があることを知らなかった」という接触効果によるところが大きい。これは嬉しいことなのだが、その反面、私がどんなに後輩の世話をしたところで、正規の教員でない私は、無給なのである(笑)

<sup>2)</sup> 私の知る 都大学の物理学科、あるいは数学科の学生の一部は、この世のものとは思えないほど聡明で、かつ人格者であった。

<sup>3)</sup> これは私の邪推ではない。それは私の元指導教官自身が認めている事実である。

<sup>4)</sup> ただし、この場合、「データを見る」とは、ある程度の量を、集中的に解析する(例えば、ある特徴に関してマーキングする)ことを意味する。マーキングというのは(主に)生物学の手法で、個体認識のためにタグ(= 標識)をつけたりすることである。

## c. 回り道を恐れてはいけない

これらの助言の背景になっていることを、以下でもう少し詳しく説明したいと思います。

## 2.1 助言 1 のように助言する理由

(1) の助言を繰り返します: 下らない論文や研究書を読む時間があつたら、その時間を惜しんでデータを見なさい。

でも、なぜ?

第一に、大抵の論文、研究書に書かれていることは、実は下らないことばかりなのです。そうなのですが、あなたは経験が足りないので、まだそのことがわからないのです。

今のあなたに本当に必要なのは自分でデータをやりくりする技能なのですが、そういうことは論文、研究書、教科書のいずれにも書かれていないのです<sup>5)</sup>。論文に書かれているのは、多かれ少なかれデータを見る力のある研究者がそれを駆使して見つけ出した結果だけであつて、その手法ではないのです。

## 2.1.1 「不読」のススメ

一つハッキリ言っておきたいことがあります。それは:

- (6) 言語学研究者は、下らない論文、下らない研究書を読みすぎる。その結果、科学の基本である「先人の研究成果を疑い」「自分で問題を定義し、それを独力で解決する」という能力を身につけ損なつて、役立たず同然のまま学会にデビューし、そのまま「自立」する<sup>6)</sup>

ということです。これがどういう結果に繋がっているのか明らかですが、ここでは詳しく論じません。

ここで私は、敢えて「不読」を勧めます。論文や研究書は、「読めば読むほどいい」というものではないのです。読みすぎは害毒になります<sup>7)</sup>。

<sup>5)</sup> 論文や研究書にこのことが書かれていないのは理解できるが、何と教科書にも書いてないのである。私が見る限り、これは言語学の後進性の現われ意外の何者でもない。

<sup>6)</sup> 私は特に悪意があつてこういう厳しい言い方をしているわけではない。周辺領域の多くの人たち — 例えば、心理学や自然言語処理の研究者 — がハッキリ言葉にはしないが、心の底で思っていることを表現してみただけである。

<sup>7)</sup> これとは矛盾するようですが、無関係な分野の研究書を読むのは、非常に有益であることが多いです。この試論では詳しく論じませんが、これは当事者としての利害を離れた、「岡目八目」的視点が有効に働くからです。機会があれば、これに関して別に試論を用意します。

あなたは、今の時期、なぜ論文や研究書を読んでいるのですか? 論文や研究書で何を探しているのですか? いいアイデアですか? そうだとしたら、今はそういう時期ではないはずですが、あなたの探しているのは、答えですか? だとしたら、あなたは自分の問題を解ける形に表現していますか?

まだまだ研究者として一人前とは言い難いあなたが身につけなければならないのは知識ではないのです。そうではなくて、データを見る力、正確にはデータを見て、そこに現れている重要な性質を見抜き、それを自分の言葉で表現する力なのです。

ここで私の言うデータを見る力は、いくら偉い研究者の論文を丹念に読んでいたところで、絶対に身につかないものです。それは明らかに、ある程度の量のデータを、一定の仕方で見ない限り、絶対に身につかないものなのです<sup>8)</sup>。現在の言語学の教育プログラムでは、このことはあまり強調されていません。困ったことです。認知流とか、生成流とか、機能流とか、そんなへんちくりんなモノの見方を身につける前に、まずまっとうなデータの見方を身につけなければならないはずなのです。私は、数学や物理に流派があるとは聞いたことがありません<sup>9)</sup>。

## 2.1.2 料理に関する知識と実践知としての調理の違い

言語の科学者にとって本質的に重要なのは、(任意の) データを思い通りに処理する手法、あるいは「調理法」であつて、データに関する博(物)学的な知識ではないのです<sup>10)</sup>。これは料理と比較したら、すぐに解ることです。調理は実践知であり、「何とか料理は何とか地方の名産だ」とかという料理に関する(雑学的)知識ではないでしょう? 言語研究もそれと同様、第一に実践知であり、知識ではないのです。ただし、明らかに(日本の)言語学者は、この種

<sup>8)</sup> 「この〈一定の仕方で見ると〉とは、実際にはどういう風に見ることなのか?」という問題の答えは自明ではない。実際、私はその方法を教えて欲しいと一人の学生から依頼されている。現在、準備中である。

<sup>9)</sup> 実際には、数学や物理にも流派(Brouwer や Mach の「直観主義」とか Hilbert の「形式主義」とか)が存在しますが、言語学の流派とはまったくレベルが異なります。第一、そういう流派ごと結果が異なつたり、お互いに結果をけなしあつたりすることはまったくないが、あつたとしても極めて例外的な、根本的な場合に限られます。

<sup>10)</sup> 余談ですが、博覧強記の異才として知られる南方熊楠は、実は知識の人ではなくて、「昆虫記」で有名な H. Fabre と並ぶほど徹底した観察の人(というか「観察の鬼」)でしたが、このことはあまり知られていません。

の雑学に走りがちです<sup>11)</sup>

### 2.1.3 自分で問題を定義し、それを解こう

現行の言語学の教育課程は、学生が下らない知識ばかりを増やし、データ解析のために必要不可欠な分析能力を身につける機会を与えないのは明らかです<sup>12)</sup>。これがいかにバカバカしいことであるか、次に示す物理の問題を解く場合と比べると、明らかになるはずです:

あなたは物理の問題を解こうとしたが、その答えが解らない。さあ、どうする？

- (7) あなたがもし物理が得意でないなら、あなたのはすることはきつこうだ — あなたはまず、物理の参考書をいろいろ見て、その答えを探す。答えらしきものが見つかったら、物理の得意な知り合いに聞いて、それが正しいか確かめる。

これに対し、

- (8) あなたがもし物理が得意なら、あなたは答えを探したりしない。あなたは、その問題が解けない理由を探す。具体的には、自分が解ける他の問題と、目前にある解けない問題がどう異なっているかを理解し、その食い違いを埋める方法を見つけようとする。つまり、解けない問題を、解ける問題に変型させようと努力する

この違いは本質的です。

私は疑問なのです — あなたは物理の不得意な学生がやっているのと実質的に同じことを言語学でやっていませんか？ そうだとすると、あなたは言語学には向いていない可能性があります — 少なくとも今の時点では、そうなります。それは致命的です。物理の問題に物理の苦手な学生が正しい解決を与えると期待できない以上、同様の理由で、言語学の問題に言語学の苦手な学生が正しい解決を与えると期待できないはずで、そうでしょう？

<sup>11)</sup> 雑学をするなら、Jorge L. Borges のように徹底してもらいたい、と強く思います。David Crystal の域に達すれば、それはそれで一芸です。ただ、言語学者みんながああなる必要は、明らかにありません。

<sup>12)</sup> 理系の大抵の課目には「実習」や「演習」というのがあって、あれは文字を媒介しただけでは体得できない実践知(あるいは暗黙知)を学生が体得するのを助ける、非常に重要な場なのです。それに相当するモノは、言語学には(音声学の入門やフィールド調査の指導を除けば)事実上、存在しません。

従って、あなたが言語学者として生き残る道はタダ一つです。物理の得意な学生が物理(学)の問題を解くように、言語(学)の問題を解決しなければなりません。今はそれができないとしても、将来的にはそれができるようにならないといけません。さもないと、あなたは全うな言語学者にはなれません<sup>13)</sup>。

でも言語学の問題って、いったい何？

### 2.1.4 問題を自力で見つける<sup>14)</sup>

もちろん、そのためには物理(学)の問題と同じように、言語(学)の問題が定義されている必要があります。ですが、これは必ずしも教科書に載っているもの、論文で議論されているものばかりではないのです。言語(学)の問題が何であるかは、部分的には自力で発見し、理解するものです。これができていない限り、ちゃんとした研究者になれるかどうかは怪しいです。これは少なくとも自然科学の分野では本当のことです。

### 2.1.5 「何がわかっていないのか」を理解する必要性

これは一つのことをハッキリさせているのです。すなわち、あなたがある(言語学上の)問題の答え(あるいは課題<sup>15)</sup>の結果)が解らないとき、

- (9) a. あなたは自分がどんな問題、あるいは課題を提起し、解決しようとしているのか、まだ自分自身で理解していないか、  
b. 問題として自覚され、理解されてはいるが、解ける形で表現されていないか、  
c. 解ける形で表現されているのに、その解き方をあなたが個人的に知らないか、  
d. その問題の解き方が一般に知られていないか

<sup>13)</sup> 今の言語学会に、この意味で「全うな」言語学者がどれくらいいるか、私は知らないが。

<sup>14)</sup> この節の内容は 12/03/2006 の改訂で追加された。

<sup>15)</sup> ここで言う「課題」とは「どうなっているのだろうか?」という、より一般的な対象の性質の特定が中心になる作業であるが、問題と課題の区別は実際には本質的なものではない。問題というのは、あくまでも課題の一種で「これは何だろうか?」とか「これはなぜだろうか?」という特別な形をしているにすぎないが、それに何らかの「答え」があると想定されている点が、課題とは微妙に異なっている。例えば「話し手による不満の表明と、表現される言葉遣いの関係はどうなっているのだろうか?」という疑問は、(些か漠然としているけれど)正しい問題を定義しており、それを詳細に調べるのは正しい課題の実行である。もう一步進んで、「{いちいち、わざわざ}」のような副詞は不満と強く関係しているかも知れない」というのは検証可能で妥当な仮説であり、これを検証することは、正しい課題である。

のいずれかなのです。まず、自分がどの段階にいるのかを自覚し、それに応じて対処しましょう。

私を見る限り、たいいていの人(9a, b)の段階です。(9c)に到っている人は稀です。研究書や論文を漁るのは(9c, d)の段階にいる研究者がすることです。

### 2.1.6 信憑性を疑いつつも助言を貰おう<sup>16)</sup>

ただし、次のことには注意が必要です。初学者は、自分自身がどんな問題を扱っているか解っていないことが多いということです。これは自分だけの力ではどうしようもない部分があります。

こういうときこそ、自分の周囲にいる先生、先輩を利用しましょう。自分が今、どんな問題を抱えているのか、その位置づけに関して、積極的に彼らに尋ねましょう。実際、先生、先輩というのは、「迷える小羊」たるあなたを導くために存在するので、特に先生の給料の一部は、あなたを指導するために支払われているのです。あなたは当然の権利を行使しているだけです<sup>17)</sup>。

それでも、先生、先輩の意見を鵜呑みしてはいけません。非常に逆説的ですが、優秀な研究者ほど、先輩、先生の言うことを疑い、平凡な研究者ほど、先輩、先生の言うことを真に受けます。

これが意味することは深刻です。そもそも、分野が何であれ、自分自身のものの見方が備わっていない人には、研究という活動時代が向いていないとすら言えます。

## 2.2 助言 2 のように助言する理由

さて次に、(2)の助言を繰り返します：一つでいいから何から「きっこうだ」と思えるものを見つけなさい。これは研究の始まりです。そういうものを見つけなかったら、研究を始めることすらできません。他人の研究をまとめるのは、研究ではありません。

「きっこうだ」と言えるものは、人の意見の受け売りでは困ります。それは自分が観察を通じて直観したものであることが望ましいです。これが私が(1)の助言で「下らない論文や研究書を読んでいる

時間があつたら、その時間を使ってデータを見なさい」と力説する最大の理由です。

ただし、初学者は得てして重要でないものを重要だと勘違いをするので、それを避けるためには十分な観察力が備わっていないといけないこととなります。ここで重要なのは、観察力は、観察のみによって鍛えられるということです。観察力が備わっていない段階で他人の意見に迎合することは、研究者が絶対にしてはいけないことです。にもかかわらず、人文系の研究にはこれが横溢しています。あなたは、絶対にその「悪しき伝統」を引き継がないように、極力注意して欲しいと思います。

特に強調して置きたいのは、初学者のうちはもっともらしい説明に飛びついてはいけないということです。知識が足りないと往々にして説明でないものが説明に見えがちです。

## 2.3 助言 3 のように助言する理由

(2)の助言を繰り返します：自分の探しているもの — それが「重要な事実」であれ「何かの答え」であれ「うまい説明」であれ — それが研究書、誰かの論文、教科書にすでに書かれていて、探せばそれが見つかるかと期待するのは止めなさい。

でも、なぜ？

答えの一つは、あなたが(9c, d)の段階にいる研究者でない限り、それには意味がないからです。

もう一つ、もっと重要な理由があります。そういうことがすでに、どこかに仮に書かれていたとしても、実はそんなことは、あなたのような初学者のレベルではぜんぜん重要じゃないのです。そういうことが重要になるのは、あなたが運良く専門家の端くれになったときの話です。ですが、あなたはまだ専門家になっておらず、そのための訓練をしている段階です。先のことを心配するより、足元のことを心配しましょう。

### 2.3.1 あなたに本当に必要なものは洞察力

繰り返しになりますが、あなたに欠けているのは、自力で事例を見る力、つまり観察力と、事実として観察しうることのうちで何が重要で、何が重要でないかを見極める力、洞察力と呼ばれる「心の眼」です。

あなたはまだまだ専門家ではないのです。その道ウン十年の先輩と同じ知識も経験もなく、それが今のあなたに洞察力がない理由です。単にそれだけのことです。

<sup>16)</sup> この節の内容は 01/09/2005 の改訂で追加された。

<sup>17)</sup> ただし、ときどき不幸なことに、指導教官の助言が助言の用をなさない場合もある。自分がその不幸な場合に該当するかしないかを判断するのは、自分か、あるいは自分の周りにはいる先輩か、ということになる。こういう意味で、人間関係というのは、研究において本質的に重要なものである。これに関連する議論は、[10]も参照して欲しい。

洞察力は訓練しない限り、身につけません。少なくとも「論文を読んでいればいつか、自然に身につく」という類のものではありません。

洞察力は才能ではありません。誰でも訓練すれば身につけられる技能です。多くの自称言語学者がこれを身につけていないのは、その必要性が正しく理解されておらず、理解されていても、それを正しく訓練する教育プログラムがないからです。

繰り返しになりますが、洞察力は、ある程度の量のデータを見ない限り、絶対に身につけません。だから何より、データを見、直観を培うための貴重な時間を、「すでに解決されている問題の答えを探す」ような下らない目的のために浪費するのは止めなさい。それは今まで、非常に数多くの先輩たちが陥ってきた過ちです。

### 2.3.2 「自力本願」のススメ

ここで本質的に重要な点を繰り返します: 事実や答えは自分で見つけることに価値があるのです。幾らそれを論文や研究書の読書経験を通じて、「知識として」知っていたって、ほとんど無価値なんです。

とりわけ次のことを忘れないように: 何かを人より先に見つけることより、誰の助けも借りずに、独力で見つけることの方がずっと尊いのです。そして、これは「どこかに、すでに答えがあるはずだ」と期待する「他力本願」的な態度とは、まったく相容れません。研究の本質は「自力本願」です。

どういうわけか、日本の教育では全般的に博学性を優先させ、問題解決能力の獲得、つまり自力本願能力の修得を重視しません。それが「賢い」だけで「使えない」人間が大量生産されている理由だと、私は思います。

## 2.4 助言 4 のように助言する理由

最後に、(5)の助言をここで繰り返します:

- (10) いい研究をするためには
- 失敗を恐れてはいけない
  - 無知を恐れてはいけない
  - 回り道を恐れてはいけない

私がこれらのことをあなたに助言する理由が、何となくわかってきたでしょう?

### 2.4.1 失敗するのが当たり前

若いうちは経験が足りないから、失敗します。ですが、それでいいんです。そういう失敗を理由に意気消沈してはいけません。若い研究者に経験が足りないのは、当たり前なんです。問題は、それを自覚

し、そこから次のステップに進むために、どうするかです。

実際、経験不足は長所なんです。「ムダかも知れないけど、とにかくやってみよう」と思えるのは、非常に大切なことです。それが科学を進歩させる偉大な第一歩になることは多いのです。科学を進歩させるのは、いつも先の先まで見越しているような、頭のイイ連中ばかりではありません。科学の歴史は、実際には泥臭い、試行錯誤の連続だったのです<sup>18)</sup>。

### 2.4.2 無知なのが当たり前

自分が無知であることを当たり前の事実として受け入れられるようになりましょう。無知に無用な羞恥心をもつのは日本人の悪い癖で、これは日本人が頭脳が優秀な割りに世界レベルの研究レベルをしない理由の一つだと私は思います。

### 2.4.3 回り道のススメ

少しきついとは思いますが、次のことは本当です: 言語分析を単なる知識ではなく、技能として体得するためには、先人が通ってきた道を、自分でも通ってみる必要があります。これはハッキリ言うと「回り道をしなさい」と言っているのに等しいと思います。ですが、私はよい研究者になるためには回り道をする必要があると信じます。そうでない研究者の仕事は、得手して表面的で、深みがありません。

### 2.4.4 「新規性」という落とし穴

回り道をして、その結果、先人と同じ結果を出すことは、まったく悪いことではありません。それどころか、修士のレベルで偉大な先人と同じ結果を出せたとすれば、それは自分がその人と同じか、それ以上の実力をもっていることの証になりうることでしょう? なぜそれを素直に喜べないのでしょうか?

確かに現行の制度では新しい結果でないと評価されません。でも、初学者のうちからそれにあまりに左右されるのはよくないと思います。若くて、柔軟な考えができるうちに新規性を追求するのは重要ですが、それに拘りすぎるのも、お勧めできない方針です。初学者に必要なのは、何といてもまず、最低限の実力です。

新規性が本当に重要になるのは、研究者の卵の領域ではなくて、むしろ一人前の研究者のレベルです。彼らの多くはそろそろ頭が固くなり始めているのと、つまらない見栄を気にして、思いきった失敗

<sup>18)</sup> 科学の中身がいかに泥臭いかを垣間見るには、例えば [2, 5, 6] などがお勧めです。研究者、科学者(あるいは数学者)と呼ばれる人々がいかに泥臭い人間であるかを垣間見るには、例えば [1, 3, 4, 7, 8, 9] などがお勧めです。

ができないようになっていきます。そういう将来への投資として、今はむしろ、将来のために実力をつける時期だと割り切ったらいかがでしょう？

#### 2.4.5 名誉, 名声を追わないように

本当に重要なのは、新しい問題を定義し、それを解決するための底力です。それのお陰で若いうちから素晴らしい成果を出し、周囲から高く評価されることがあれば幸いです。それ自体は研究の目的ではないはずですが、若くして先輩から高い評価を受けることが若手にとって抗い難い魅力であるのはよく知っています。ですが、それに執着しすぎると、いい仕事はできません。名声を欲しがるともまらず、当たり前のことのできるようになりましょう。それが必要だと信じられるならば、人のしない地道な作業を、腐らないで続けましょう。あなたの運がよければ、名声はそれについて来ることもあるでしょう。

ただし、そうなる保証は、もちろんありません。研究者になるということは、そういう次元を(少なくとも部分的に)超越することです。

### 3 最後に

最後に一言: 苦しんでいるのは、あなた方だけではないのです。日本の言語学の教育プログラムは、あまりに杜撰なので、そう言っていいでしょう。それは実際、知識のみを教え、手法を教えません。ある種の問題がある種の方法で解決可能であることのみを学生に伝え、知られていなかった新しい種類の問題を自力で解決する技法を体得する訓練を学生にさせません。それは実践知の教育環境としては最悪の部類に属します。これが今の世の中に「似非科学」化した言語学が蔓延している最大の理由でしょう。

#### 参考文献

- [1] 「ご冗談でしょう, ファインマンさん(上, 下)」(岩波現代文庫—社会). R. P. ファインマン(著), 大貫昌子(訳). [原典: *Surely, You're Joking, Mr. Feynman*. R. P. Feynman. 1997. W. W. Norton and Company.]
- [2] 「カオス 新しい科学をつくる」(新潮文庫). ジェイムズ・グリック(著), 大貫昌子(翻訳). [原典: *Chaos: Making a New Science*. J. Gleick. 1988. Penguin Books.]
- [3] 「天才」. ジェイムズ・グリック(著), 大貫昌子(訳). 岩波書店.(邦訳は現在は品切れ?). [原典: *Genius*. J. Gleick. 1993. Vintage Books.]
- [4] 「放浪の天才数学者エルデシュ」. ポール・ホフマン(著), 平石律子(訳). 草思社. [原典: *The Man Who Loved Only Numbers*. P. Hoffman. 1999. Hyperion.]
- [5] 「複雑系 科学革命の震源地・サンタフェ研究所の天才たち」(新潮文庫). M. ミッチェル・ワールドロップ(著), 田中三彦, 遠山峻征(翻訳). [原典: *Complexity*. M. M. Waldrop. 1994. Simon & Shuster.]
- [6] 「二重らせん」(講談社文庫). ジェームス・D・ワトソン(著). 江上不二夫, 中村桂子(訳). [原典: *Double Helix*. James Watson. 2001. Touchstone.]
- [7] 「研究者」. 有馬朗人, 松本元, 野依良治, 戸塚洋二, 榊佳之, 本庶佑(著). 2000. 東京書籍.
- [8] 「研究力」. 有馬朗人(監修). 2001. 東京書籍.
- [9] 「科学者の熱い心 その知られざる素顔」(講談社ブルーバックス(B-1274)). ルイス・ウォルパート, アリスン・リチャーズ(著). 青木薫, 近藤修(訳). [原典: *Passionate Minds: The Inner World of Scientists*. L. Wolpert, and A. Richards. 1997. Oxford University Press.]
- [10] 黒田航. 2004. (一見不作法な)謝辞のススメ: 脱「お妾さん気質」のための効果的な謝辞の活用法. <http://clsl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/human-use-of-acknowledgements.pdf>